

「パラグアイのマテ茶文化と薬草文化と女性たち」

藤 掛 洋 子

<Ⅶ 論文・研究報告 (1) >

パラグアイのマテ茶文化と薬草文化と女性たち

藤掛 洋子*

1 はじめに

本稿では、南米大陸中央南部に位置するパラグアイ共和国（以下、パラグアイ）を取り上げ、パラグアイの民がこよなく愛するマテ茶（モチノキ科の常緑喬木、学名は *Ilex paraguariensis* : イレクス・パラグアリエンシス、別名、マテ、パラグアイチャノキともいわれる）文化と薬草文化を紹介する。パラグアイでは、マテ茶の冷たいものを *tereré*¹ : テレレと称する。

また、薬草文化と女性たちの受胎調節について、パラグアイ中央人口研究所のデータ（CEPEP 1997, CEPEP 2004）を用い分析する。

次の2章において、パラグアイの概況を述べ、3章では、パラグアイで飲まれるマテ茶について、起源や成分について論じる。また、パラグアイ農村部に残るマテ茶の製法について、カニンデジュ県の具体的な事例を前澤（2005）より紹介する。4章では、パラグアイの女性たちが避妊として用いる薬草について述べ、おわりにでは、パラグアイに深く根付いたマテ茶と薬草文化の今後について考察する。

2 パラグアイ共和国の概況

パラグアイは、宗主国スペインより1810年に独立した。総人口は5,206,101人であり、農村人口は2,252,933人（43%）である（DGEEC 2002）。国民の97%がメスティソであり、90%は宗主国の影響を受けたカトリックである。

中央アンデスとは地勢も大きく異なり、パラグアイの標高は80mから850mで森林の多い丘陵地と平地が交錯し、大地は緩やかに波打っている。国土の総面積は、約41万km²（日本の1.1倍程度）

で中央を南北に貫流するパラグアイ河の東西で二分される。パラグアイ河とパラナ川に挟まれた東部パラグアイは国土の約40%を占め、159,827haの面積を有する。東部には、総人口の95%が居住し、農業生産の大部分も東部で行なわれている。

一方、西部はチャコ地方と呼ばれ246,925haの面積を有し、国土の60%を占める面積には、総人口のわずか5%しか居住していない。

東部地域の地質は、赤色砂岩（MISIONES 砂岩）上を中生代の白亜紀に噴出した玄武岩が覆っており、テラロッサといわれる土壌を形成し、肥沃な農耕地となっている。テラロッサには、鉄分が非常に多く含まれ30年間肥料なしでも作物が育つともいわれる。この肥沃な土地が、マテ茶に豊かな栄養を与えていると考えられている。

アルフレド・ストロエスネル（Alfredo Stroessner）により35年間続いた軍事独裁政権は1989年に終焉し、1992年に新憲法が制定されていた。

新憲法において公用語は、スペイン語と先住民の言語であるグアラニー語が定められているが、農村では日常生活にグアラニー語を用いる人々が多い。農村人口の約半数が貧困状態にあり、内700,000人が最貧困層（絶対的貧困）に位置付けられている（Berry 1999）²。貧困層に位置付けられる人々の85.6%がグアラニー語のみを話す人である（DGEEC 1997）。

3 マテ茶

3-1 マテ茶の起源

マテ茶は、アメリカ大陸の先住民、とくにトゥピ・グアラニー（以下、グアラニー）が供していたと考えられている。キャッサバやとうもろこ

* 藤掛 洋子（ふじかけ・ようこ） 家政学部家政学科

しを主食とする先住民族たちにとってマテ茶は、不老長寿の薬として常用されたといわれる。

グアラニーは、南アメリカの先住民族集団であり、グアラニー語を話す諸民族の総称である。グアラニーは、アマソニデ (amazonide) と呼ばれ、アマゾン周辺で暮らしており、パラグアイ周辺に南下してきたのは紀元前500年頃といわれている (Súsnik 1982, 藤掛2007)。

バンパ地方では、ガウチョ (牧童) もマテ茶を常用してきた。現在のアルゼンチン、ウルグアイでも、パラグアイと飲み方に多少の違いはあるもののマテ茶は広く飲まれている。

マテ茶は、ブラジル南部からアルゼンチンの北東部の山地が原産で、パラグアイの主要輸出品の一つでもある。マテ茶の近年の生産・消費量は、ブラジルが約20万トン、アルゼンチンが約17万トン、パラグアイが約4万トンの順になっている³。

3-2 マテ茶の飲み方

マテ茶は、グアンパ (guampa)⁴といわれる、パロサント (Palo Santo: 聖なる木)⁵や瓢箪、牛の角をくりぬいた容器に葉を入れ、お湯を注ぎ喫飲する。暑い季節は水でテレレとして喫飲する。

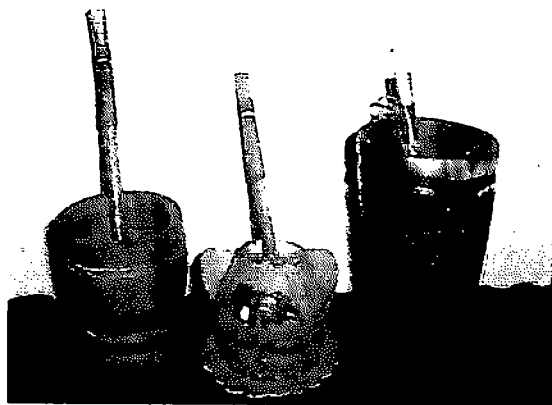


写真1 グアンパとボンビージャ
左から、パロサントの木、瓢箪、牛の角をくりぬいたもの

マテという名前の由来は、マテ茶の吸引具の器である瓢箪植物の名称からきているといわれるが、定かではない。マテ茶は南米では、「友情の記し」として廻し飲みをすることが知られているが、これは「マテ茶をごちそうになるひとは必ず帰って

くる」という古い格言に基づいてのことである⁶。

パラグアイの人々は、生鮮野菜を食する習慣があまりない。1995年に南米南部共同市場 (Mercosur) に加盟し、パラグアイ農牧省は野菜栽培と消費を推進したが、農村部の人々に野菜を消費する習慣はなかなか定着しない。一方、パラグアイ人の平均寿命は、75歳 (2005年) と決して短いものではない。それは、マテ茶やテレレ、そして4章で述べる薬草に起因するものであると多くの研究者が指摘している⁷。

3-3 マテ茶の話

マテ茶は神の木という人もいる。次に紹介する話は、パラグアイにあるイグアス日本語学校のテキストに掲載されている神話である⁸。

昔、月の神と雲の神がいました。二人はとても仲良しで、時々空から地上に降りてきて、森の中で遊ぶのが好きでした。

森には、きれいな花が咲き乱れ、大きな木々が涼しい木陰をつくり、清らかな水をたたえた美しい湖もありました。二人が地上にいる時は、女の子に姿をかせ、花輪をつくったり、木の陰で語り合ったり、水浴びをしたりして楽しく遊んでいました。

ある日、いつものように女の子の姿で森の中にいた二人の目の前に、突然大きなトラが襲い掛かってきました。

二人は悲鳴をあげて逃げまどいました。幸いなことに、近くで猟をしていた猟師が、その声を聞いて駆けつけてきました。猟師は、自分が持っていた矢を、トラをめがけて打ち放ち、トラはばったり倒れて動かなくなりました。猟師が駆け寄ってきたところ、二人の姿は見えなくなっていました。

「どこへ行ったのだろう。不思議だなあ。」と思いながら、猟師は家に帰りました。

その夜、猟師は夢を見ました。夢の中には二人の女の子がでてきました。

「私たちは神さまです。今日、私たちを助けてくれたお礼にこの木をあげます。この木は「カア (ka'a)」の木と言います。病気の人にはとてもいい薬になります。」

次の日、猟師はきのうの場所へ行きました。きのうの大きなトラの姿はなく、そこには小さな木が1本はえていました。『カア』の木です。

猟師はその木を家へ持って帰り、その葉を皆に分けてあげました。おかげでみな病気をしないで、健康に暮らしたということです。

この「カア」の木がマテ茶です。パラグアイではこのお茶をととても大事にしています。神様にいただいた木だからです。

このようにパラグアイで生きる日系一世、日系二世、日系三世たちにもマテ茶の大切さが語り継がれている。

3-4 マテ茶の成分

マテ茶は、葉を熱気で乾燥させ、砕いたものである。粉碎した状態のものを一般的には yerba : ジェルバという。ジェルバにはカフェインが約1%, 他にタンニンが約9%, ビタミンA, ビタミンB, ビタミンB2, ビタミンCなどが含有されており、カルシウムの含有量は緑茶よりも高く、アルカリ度は、ウーロン茶や緑茶の2倍程度である(表も参照)。

表 グリーン・マテ茶の成分表
(株式会社日本マティン取り扱い商品100g中)

成 分	含有量
カルシウム	822mg
マグネシウム	508mg
亜鉛	44.9PPM
鉄分	40.2mg
ビタミンA	10.3mg
ビタミンB1	0.15mg
ビタミンB2	0.51mg
ビタミンC	26mg
タンニン	9.13%
食物繊維	52.7%
葉緑素	175mg
パントテン酸	0.13mg
無水カフェイン	0.92%

分析試験依頼先:財団法人日本食品分析センター
出典:「編集部だより」,『クロスロード』,1994:51。

また、ジェルバに含まれる鉄分、亜鉛、マグネシウムなどのミネラルのほか、マティンと呼ばれるテオプロミンなどが体の疲れを癒すと考えられている。

ここ数年、企業によるジェルバの商品化は目を見張るものがある。筆者がはじめてパラグアイに居住した1993年から1995年頃までは、パラグアイ産のマテ茶のブレンドは、筆者の知る限りでは、2種類しかなかった。しかし、2000年以降、その種類は増加し、2007年の現在、パラグアイ産のものだけでも10数種類を越す状態にある。

昔から馴染みのあるパハリート (Pajarito), コロン (Colon), オロ・ベルデ (Oro Verde), アバレ (Avare), ラルビア (La rubia), セレクタ (Selecta) などが有名である。特に、セレクタには、ユーカリの葉をブレンドしたもの、ペパーミント⁹の香りのするもの、シトラス¹⁰とボルドー¹¹をブレンドしたもの、ペパーミントとボルドーをブレンドしたものなどがあり、その種類は豊富になりつつある。

通常、ジェルバは、都市ではスーパーで、また地方都市や農村部では Almacen: アルマセンと呼ばれる小さな売店で販売されており、それを人々は購入して飲む。



写真2 マテ茶 コロネル・オビエド市のスーパーにて (2006年撮影)

しかし農村の一部の地域では、自分の土地¹²にマテの木を持っている人々もあり、他所で買わずに自分たちでジェルバを作り、それを飲むこともある。

3-5 カニンデジュ県農村部のマテ茶づくり¹³

本章では、カニンデジュ県ウガティミ市農村部におけるマテ茶づくりの事例を紹介する。

ジェルバ・マテの木を持っている／いないに関わらず、ウガティミ市農村で暮らす人々の一般

的な意見として、店で販売されているジェルバよりも家庭（家内制）で作られた自家製ジェルバの方が美味であるという。前澤（2005）によると、販売されている企業製のジェルバは、マンゴやピワの葉が水増しのために混ぜられており、そのために純粋な良い味がしないという。

生産量は少なくとも電気機械を全く使わない自家製のジェルバは、パラグアイで培われてきた伝統的な味と製造方法を残しているのではないかと、ウガティミ市で暮らした前澤は指摘する。

① マテ茶の葉の乾燥プロセス



写真3 マテ茶の木の前で

マテの木（写真3参照）は、陰樹で特に幼木時に日陰を好む。天然林においても他の樹木の日陰や日照の少ない林内で育つ。ある程度成長した後は単体で陽にさらされても枯れなくなる。写真3、写真4に見るマテの木の大きさは、その葉を収穫するのに丁度良い。写真は収穫後、葉が再び萌芽した後の状態である。

栽培したマテの木の葉を収穫する場合は、植え付けから2年程度育った樹木が良いといわれる。しかし、現地の生産者は、天然木からも収穫するため、経験に基づいて適当な大きさに成長した樹木から葉を収穫する。

葉の収穫方法は、マチュエテ¹⁴などの農具を用い枝ごと切り落としていく。収穫後の木は、幹と太い枝だけが残された状態になる。その後、木は萌芽するので適当に成長した後、また収穫することが出来る。成長の度合いによるが、よく成長するものは1年に1度、葉の収穫が可能であるという。



写真4 ジェルバを焼して乾燥させるための装置（概観）

収穫した葉と枝は、ある程度の長さに枝を保たせたまま適当な束にする。それを列状に並べ、長い強度を持った棒で挟み、落ちないようにして、火で乾燥させる。

地面には深さ1 m程度の穴を掘り、その穴の中で火をおこす。炭火が良いとされるが、無い場合は通常の火を用いる。穴の中の火の上にまとめて挟んだ枝葉を吊るし焼すように乾燥させる。その際、熱くなり過ぎて黒くこげたり、葉の色が変色したりしないよう火力と火と葉の距離に気をつける。

葉が乾燥したらジェルバの完成である。ジェルバは手で握るとバリバリと簡単に粉々になる。以上が基本的なジェルバの乾燥方法である。

写真4はジェルバを乾燥させる装置の一つであり、およそ長直径6 m、短直径4 m、高さ2 m、村では極めて大きなものである。

しかし、このような大きな装置を有する世帯は限られており、穴を掘って火をおこすという先述した簡易な方法がウガティミ市農村部では一般的である。

写真5では、ジェルバが確認できる。上にかけてられているビニールは夜露をよけるためのもので

ある。



写真5 ジェルバを燻して乾燥させるための装置と乾燥した状態のジェルバ

写真6は、乾燥機とその下から2mほど離れたところに掘られた穴である。この穴は乾燥機の真下にある煙突までつながっている。ここで火をおこして熱気を煙突から出すことによって葉を乾燥させる。写真6の手前には木の棒がある。これは、燃えカスや灰をかき出したり、薪を奥に押し入れたりするために使われるものである。



写真6 乾燥機と火をおこす穴

写真7は乾燥機の真下にある煙突である。乾燥機の天井は平坦ではなく、下から見るとドーム状

になっていることがわかる（写真8）。これは、熱が均一に効率よくいきわたるように作られたものであり、農民あるいは、先住民族の知恵だと考えられる¹⁵。



写真7 乾燥機の下に設けられた煙突

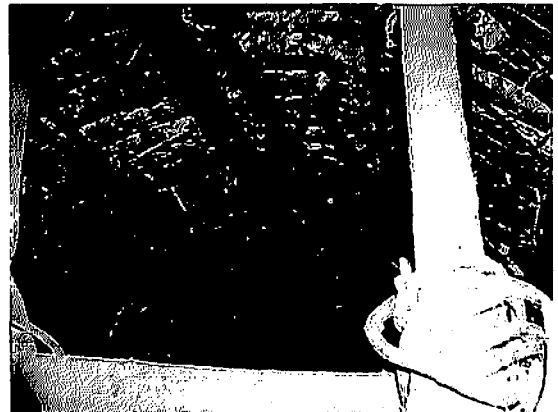


写真8 ジェルバ乾燥装置の下から

②ジェルバへの加工プロセス

写真9は、農村女性（メスティーンズの女性）が臼と杵を使い乾燥したジェルバを粉にしているものである。マチェテなども使い長い小枝は短くする。大きく目立つ枝などの混ざり物は手で取り除いていく。取りきれない小枝はそのままにしてお



写真9 ジェルバを臼でついて粉碎する女性

くため、市販のジェルバよりも小枝の混入率が多く、ジェルバも大きい。

粉碎作業は、注意深く行わなければならない。細か過ぎるとボンビージャで吸い上げたときに目詰まりしやすくなったり、通り抜けて口に入ってくるジェルバが多くなるからである。

保存するためには、粉の方が容積が少なくてすむため良いとされるが、その作業を行うのは主に女性であり、楽な仕事ではない。

粉にすると飲むことが出来る。市販のジェルバをまったく買わず自家製のものだけで賄っている家もある。

③マテ茶・テレレの喫飲

写真10は、パラグアイにおけるごく日常のテレレの風景である。このような光景は、農村のみならず、地方都市でも首都でも見ることができる。家族や親戚、友人たちが思い思いに集まって座り、好きなだけテレレを回し飲みする。

写真では中央奥の迷彩服を着た男子が給仕役をしている。村で開催される公式な会議などでは、男性が輪になって座り、女性がマテ茶やテレレを

給仕する姿をよく目にする。都市部のオフィスでは、子どもが給仕することも多い。



写真10 テレレの風景
(中央奥の迷彩服を着た男性が給仕役)

夏は日差しが強いため、写真のようにマンゴーなどの木の木陰を選んでテレレをする。この時間と空間がパラグアイの人々にとっては大切である。暑い太陽の下行った農作業で流れ出た水分の補給にもなり、疲れた体にビタミンを補給することにもなるからだ。

4 マテ茶と薬草文化

パラグアイには薬草文化も残っている。先住民民族グアラニー人たちの古来の知として、マテ茶の香りを高めるために、マテ茶やテレレの中に様々な薬草 (yuyo) を入れて飲んできた。

また、多くの薬草を頭痛や腹痛、風邪などの疾患の治療および予防に用いてきた (Arenas & Azorero 1977)。パラグアイの人々は、今日もマテ茶を好みの味に仕上げたり、体調をみながら薬草を選び、日々飲んでいるのである。

農村部では、一般的に女性たちが、日常の仕事として、新鮮な薬草を裏庭などから摘み取り、洗い、両手で揉んだり、使用する薬草によっては、根や茎などの固い部分をすり鉢のようなもので潰し、ハラ (jarra: 水差し) の中に入れ、水を入れる (藤掛 2004)。それからグアンパにジェルバを斜めに詰め、マテやテレレを喫飲する。

写真11は、街のあちらこちらで売られている多種多様な薬草である。写真12は、薬草をすり潰す



写真11 街角で売られている薬草

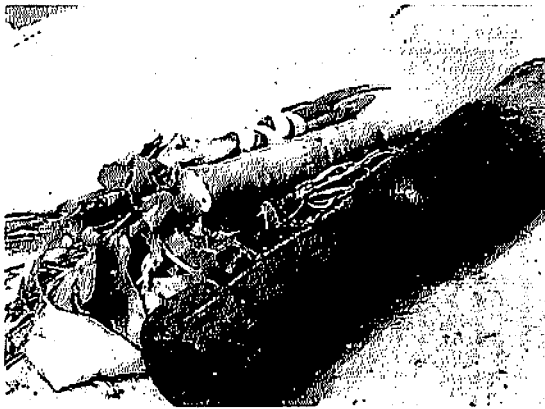


写真12 すりこぎで薬草の根をすり潰す

ために用いるすりこぎである。大きなすり鉢とセットになっている。

すりこぎとすり鉢はバロサントの木でできており、薬草をすり潰すと大変良い香りが立ち込める。

4-1 薬草を用いた受胎調節

本節では、パラグアイの女性たち（先住民族の女性たち、メスティーソたちの双方を指す）が、疾患の治療のみならず、受胎調節のために様々な薬草を古来より用いてきたことを紹介する（Bull & Melfa 1998, Fujikake 1999, 藤掛 2003）。

薬草を用いた受胎調節の方法は、他の国でもみられる。例えば、米国東部の高地、アパラチア地方では、Queen Anne's laceと呼ばれる薬草をお茶にしたものを、性交のあとに服用し、妊娠を避けてきた（Bull & Melfa 1998:50）。このような方法は、古代ギリシャに起源を発すると考えられており、

当時は、silphiumといわれる薬草を用いていたと考えられている（Rensberger, 1994）。

南アフリカ、中国、インド、グアテマラ、フィリピン、コスタリカ、ハイチは、薬草の服用により避妊を行ってきた国であり（Cominsky 1986; Low & Newman, 1985; Mathonsi & McKenzie, 1991; Quijano, 1986; Sharma & Sharma, 1989）、パラグアイが特殊なケースでは決していだろう。

4-2 パラグアイの受胎調節に関わる薬草

パラグアイの受胎調節に関わる薬草には、大きく分けると4つのタイプがある。①妊娠しないように服用するもの、②避妊するためのもの、③人工妊娠中絶を目的としたもの、④より多くの子どもを授かることを目的としたものである（Bull & Melfa 1998:50）。

①妊娠しないように服用する一般的な薬草には、*poha po'i*, *piri taja*, *poha marangatu*, *aikanegot* などがあり、これらは、浸水したり、煎じたりしたものを毎日服用するのが一般的である。

②避妊のためのものとしては、*rituremich*, *muiaha*, *yvyra rapo ju*, *inaktinaie*, *mangui* が用いられ、③人工妊娠中絶を促すものには、*rahorro*, *olkja* がある。これらは、根と葉を煎じて飲む。

筆者のフィールドにおける聞き取り調査で、薬草を服用した以下のような自発的人工妊娠中絶の事例に遭遇したこともある。

S村の隣村に住む23歳の既婚女性が村に伝統的に伝わる薬草を服用し、その後木に登り、上から故意に落下し、打撲することで出血した。病院に運びこまれ妊娠を中断するための処置を受けた（村の女性：カアグアス県）（藤掛 1999: 5）。

④より多くの子どもを授かることを目的としたものには、*ita poty*, *ja piningui*, *memby jauja*, *batatilla* があり、これらはマテ茶などに入れて、数週間から数ヶ月飲まれる（Arenas & Azorero, 1977）。

薬草を服用することによる避妊の効能は、科学者や政策策定者、家族計画のプログラムを推進する人々に否定されてきた（Bull & Melfa 1998:50）。なぜならば、近代的避妊法であるピル、ホルモン注射、デポ・プロベラ、ノルプラント、卵

管結紮、パイプカット、コンドーム、ベッサリーの装着などにより、世界的に人口が減少したという現実があり (Bongaarts 1994)、一方、ビルングス (billings)¹⁶ やリズム法 (日本ではオギノ法といわれる)、膣外射精、薬草の服用といった自然的避妊法では、まだ多くの失敗がみられるからである (Bull & Melfa 1998, Fujikake 1999, 藤掛 2003)。

しかし、先述した通り、薬草の服用により避妊を行う方法は世界的に行われており、11種類の薬草を用い動物実験を行った結果、100%受精卵とならなかった (Chaudhury, 1985) という結果も古いデータになるが出されている。

パラグアイの薬草に関する研究では、カアヘ (ka'a he'e) という名前で知られ、今日、世界中で自然甘味料として販売されているステビア (*Stevia rebaudiana*) の避妊の効果は認められなかった (Schvartzman, Krimer, & Azorero, 1975) もの、*ysypo* または *patito* として知られる *aristolochia triangularis* は、人工妊娠中絶を引き起こす可能性が認められている (Schvartzman, Benitez, & Azorero, 1975)。

Schvartzman, Benitez, & Azorero の研究データもまた古いものであり、人工妊娠中絶を引き起こすかどうかは判断できかねる。しかし、先の事例でも示した通り、パラグアイの女性たちがなんらかの薬草を服用することで、妊娠の継続を中断しようとする試みは、これまでの筆者のフィールド調査で何度も見聞きしてきた。

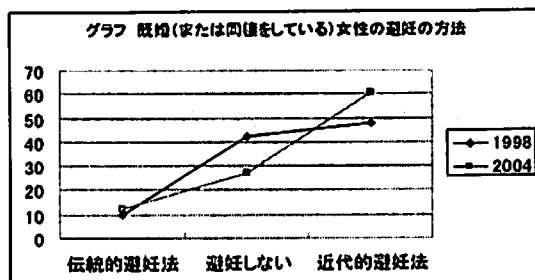
4-3 調査結果

パラグアイの中央人口研究所 (CEPEP: Centro Paraguayo de Estudios de Población) が中心となり、1995年-96年にかけて第一回、また、2003-04年に第二回「人口とリプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する調査 (Encuesta Nacional de Demografía y Salud Sexual y Reproductiva)」が実施された。この調査は、米国開発庁や国連人口基金などが資金協力し、実施されたものである。

調査対象者は、15歳-49歳までの女性であり、第一回は9541世帯が選ばれ、6464人の女性がインタビューと質問票に回答した¹⁷。

第二回目の調査では、12236世帯が選ばれ、7321名の女性がインタビューと質問票に回答した。

グラフは、既婚 (または同棲をしている) 女性の避妊の方法が、第一回目の調査と第二回目の調査でどのように変化したのかを示している。



出典: CEPEP et al. (2005) *PARAGUAY ENCUESTA NACIONAL DE DEMOGRAFIA Y SALUD SEXUAL Y REPRODUCTIVA 2004*.
より筆者作成。

CEPEP et al. (2005) *PARAGUAY ENCUESTA NACIONAL DE DEMOGRAFIA Y SALUD SEXUAL Y REPRODUCTIVA 2004*. によると、第一回目の調査において、伝統的避妊法 (薬草、リズム、粘液法¹⁸、膣外射精) を選択したのは、9.7%であり、第二回目は、12.3%とわずかながら上昇している。

避妊をしないという女性は、第一回目が42.6%であるのに対し、第二回目は27.2%と大きく減少している¹⁹。つまり、多くの女性が避妊をするという選択をしているのである。

薬草による避妊法を知っていると回答した女性たちは、全体で86.5%、都市部で86.2%、農村部で87.2%と全てにおいて高く、地域間格差はほとんどみられない。

2004年の調査では、実際に薬草を利用して避妊をしている数字は明らかにされていないが、Bull & Melfa によりまとめられた1998年の論文によると、第一回目の調査において都市部では38%が、農村部では62%の女性が薬草による避妊を行っていた (Bull & Melfa 1998: 55)。

この時の年齢別の薬草利用は、15-24歳が21%、25-34歳が32%、35-44歳が40%、45-49歳が

7%であった。このことから、薬草による避妊がかなり広く女性たちに知られており、かつ、女性たちの日常生活に溶け込んでいることがうかがえる。

第二回目の調査は、第一回目よりも調査項目が多く420項にわたるが、薬草を利用した避妊法に関する記述はなく、詳細はわからない。それでも、伝統的避妊法の%がわずかながらでも上昇していることを考えると、今日も薬草を服用している人が少なからずは存在していると推察できよう。

第一回目の調査結果における就学年数と薬草の服用の関係をみると、54%が0-5年の教育年数であり、45%が6-11年の教育年数である。11年以上の教育年数のある女性が、薬草を受胎調節の手段として用いているのはわずか1%である。つまり、就学年数のあまり長くない女性が薬草による避妊法を用いているということが出来る。

小学校への就学率は、都市部が84%であるのに対し、農村部は47%である。また、男児と女児の間にも教育を受ける機会に格差がある。農村部における小学校の就学率を男女別に見ると、男子は53%、女子は47%である²⁰。

グローバル化の波の中で、パラグアイ農村部における貧困化はますます進んでいる。女子の教育へのアクセスや教育とリプロダクティブ・ライツの関係を今後も注意深く見ていく必要があるだろう。

4-4 先住民族の知とリプロダクティブ・ライツに関する考察

薬草の効能は、口承されていく。先住民族の女性やメスティーソの女性は、薬草による避妊の知識を有しており、今を生きる女性たちは、様々な薬草を避妊法の一つとして用いているのが現状ではないだろうかと考えるが、避妊薬としての薬草がどの程度有効であるのかを、判別する資料はない。

それでもなお、パラグアイにおけるカトリックの影響を考えると²¹、薬草を用いた避妊方法が政府の政策からなくなることはないと思われる。

例えば、1998-99年に厚生大臣を務めたデ・フランコは、リプロダクティブ・ヘルス/ライ

ツの政策はカトリックの教えに反するという理由から、いくつもの家族計画に関わるプログラムやプロジェクトを変更または中止してきた(藤掛 2003)。それは、家族計画が回勅『フマネ・ヴィテ (Humanæ Vitæ)』に反すると考えられているからである(藤掛 2004)。今日でもパラグアイ政府は、近代的避妊法よりも薬草を含めた伝統的避妊法を推進する傾向にあり、厚生省などの取り組みにもその傾向がみられる。

一方、妊産婦死亡率は、ラテンアメリカの中でもハイチの次に高い246人/10万人と高い数値を示している。この背景には、マチスモ(男性優位)思想とマリアニスモ思想、近代的避妊法を否定する国家の立場と深い関係がある。2006年にパラグアイ厚生省は、パラグアイの妊産婦死亡率の原因の一つに、刑法で罰せられる人工妊娠中絶であることをはじめて認めた²²。それほど、パラグアイにおける望まない妊娠を中断するための間中絶の問題は深刻なのである²³。

薬草が受胎調節にどの程度の影響を及ぼすのかといったChaudhury(1985)のような研究がパラグアイの受胎調節に関わる薬草についてもなされ、解明されるならば、パラグアイの女性にとって薬草が科学的に証明された受胎調節の手段の一つとなりうる可能性もあるだろう。

5 おわりに

本稿では、パラグアイのマテ茶文化とそこに密接に結びついてきた薬草文化の一部を概観してきた。グアラニー人たちがパラグアイ周辺に南下してきたのは紀元前500年頃といわれており、(Súsnik 1982, 藤掛 2007)、その長い歴史の中における先住民族の知を考察するには、本稿はあまりにも短い。

それでも、今日的課題を検討するならば、パラグアイには、マテ茶文化と薬草文化という、先住民族の知を脈々と受け継ぐ豊かな文化があり、これらを抜きにパラグアイの人々のことを考えることはできないということだ。1993年より4年半以上居住する機会を得た筆者もマテ茶と薬草文化に魅了された一人である。

1985年より日本の国際協力により、アスンシ

オン国立大学科学部で薬草研究に関わるプロジェクトが展開され、成果はラテンアメリカの専門誌にも発表されている²⁴。グローバル化がすすむ今日、バイオパラシーに関する議論が深まりつつあることは幸いである。

パラグアイのマテ茶や薬草に関する知的所有権に十分に配慮しつつ、薬草の薬剤的效果や受胎調節の可能性に関する研究を深めることは重要であると考えられる。

パラグアイの女性たちが抱えるリプロダクティブ・ヘルス/ライツに関連する問題は、宗教やマチスモ思想、マリアニスモ思想、ジェンダーと教育の問題などが複雑に交錯しており、包括的な取り組みが必要であることは承知の上である。それでも、その解決の手段の一つとして、薬草が取り入れられるならば、パラグアイの人々にとって最も好ましい選択肢の一つを提供することができるであろうし、近代的避妊法のみが有効であるといった西欧近代的な価値観を今一度問い直すことにもつながるかもしれない。

パラグアイのマテ茶文化や薬草文化を守りながら、本稿で示したようなリプロダクティブライツに関する分野においても国際協力における薬草研究が支援されることを願っている。

謝辞：本稿の3-5で取り上げた、マテ茶の伝統的製造方法については、前澤岳男氏（元青年海外協力隊パラグアイ共和国派遣）に未刊行の報告書を提供頂いた。写真3、5は前澤氏から、写真4、6～10は船橋美奈子氏から提供いただいた。記して感謝の意を表したい。

注 記

- 1 以下、グアラニー語は、イタリックで示す。
- 2 世界銀行は1日1ドル以下で生活する人を「絶対的貧困」と、1日2ドル以下で生活する人を「相対的貧困」と貧困ラインを定めている。絶対的貧困は、人間が生きていくために必要な資源、つまり水や食料という物質的なものが欠如している状態をいう。相対的貧困は、物質的・精神的に劣勢を感じる状態、

つまり物質的に満たされているが、他人と比較することによって生じる意識的なものをいう。パラグアイでは、絶対的貧困が最貧困層であり、相対的貧困が貧困層である。

- 3 <http://www.matecha-kyokai.gr.jp/>（日本マテ茶協会公式HPより引用2007年5月5日アクセス）。今後の消費地としてアメリカ、日本（南米諸国から日本に出稼ぎに来ている15万人の人々の間に需要が拡大している）、ドイツ等が期待されている。
- 4 木や牛の角をくりぬいて作った容器でマテ茶を入れ、随時お湯を注ぎボンビージャを使いお茶を回し飲みする。
- 5 *Bulnesia sarmientoi* ハマビシ科
- 6 <http://www.matecha-kyokai.gr.jp/>（日本マテ茶協会公式HPより引用2007年5月5日アクセス）。
- 7 例えば、日本でもニャンガピリー（Nangapiry）という薬草が、中性脂肪を抑制することなどを明らかにした研究がある（有澤・林・百瀬 2001）。
- 8 <http://www.kinet.or.jp/yoshi-n/page058.html#lcn002>（2007年5月5日アクセス）。
- 9 *Mentha spicata*、ミドリハッカやオランダハッカの名前で日本では親しまれている。
- 10 *Citrus Aurantium*：シトラスアランチュム。橙の果実から抽出した成分。
- 11 *Peumus boldus* Molina。原産地はチリといわれる。
- 12 他人の所有している土地を占有して使用する「土地無し農民」も存在し、その所有・利用関係は複雑になっている。本稿では、彼ら/彼女らが「自分の土地だと主張している」あるいはただ「使用している」空間のことを「自分の土地」の表現する。
- 13 本項は前澤（2005）より引用。
- 14 パラグアイで一般的に使われる刃渡りの長いナタのこと。
- 15 ドーム状に組まれた木が黒くなっているのは煤のせいである。
- 16 The Billings Ovulation Method(BOM)は、妊娠可能であるか否かの症状を外陰部での観

- 察に基づき判断する方法である。BOMはいかなるリズム法、基礎体温法、薬、または用具等も必要としない（オーストラリア排卵法研究資料センター http://www.woomb.org/bom/whatis_jp.html 2007. 5. 15アクセス参照）。
- 17 パラグアイ全体の核家族は600, 167世帯である（Hogares particulares por área de residencia urbana-rural y tipo de vivienda según etnia, sexo del jefe y tipo de hogar 2002）。
 - 18 子宮頸間粘液法とも言われる。排卵日前の膣の粘液の変化によって、排卵日を特定する方法。生理が終わった後の3-4日間は膣粘液が湿った程度で、粘りはないが、粘液が卵白のように透明で、弾力があり、指にとると4-15 cmくらい糸を引いて伸びるようになると排卵が近いことを示す。この状態が約3日程続き、最後の日、またはその翌日に排卵が起きる。
 - 19 近代的避妊法を実施するとの回答は、第一回目が47.7%であるのに対し、第二回目は60.5%と増加している。
 - 20 *Presidencia de la República Secretaría Técnica de Planificación, Dirección General de Estadística* (1998): 89.
 - 21 大臣などの要職をつとめる人々は、保守派のオプス・デイであることも多い。
 - 22 Mayer, Graciela Gonzales 氏の International Workshop " 'Gender and Development' and the Local Needs: Networking for Gender Equity with Locally-Diverse Gender Needs" における口頭発表より（於：東京家政学院大学三番町校舎）。
 - 23 藤掛（2003）も参照されたい。
 - 24 国際協力機構2006（平成18）年度秋募集ボランティア要望調査票（通版：422、平成18年6月11日作成分）。
- 【FOOD Style 21】, Vol. 5 No. 2: 69-73。
- Bongaarts, J. (1994). Population policy options in the developing world. *Science*, 263, 771-776.
- Bull, Sheana S. & Melfan, Mercedes (1998) "Contraception and Culture: The Use of Yuyos in Paraguay", *Health Care for Women International*; Jan 1998, Vol. 19 Issue 1: p49-60.
- Cominsky, S. (1986). Traditional birth practices and pregnancy avoidance in the Americas. In M. Maglacas & J. Simon (Eds.), *The potential of the traditional birth attendant*. Geneva: World Health Organization..
- Chaudhury, R. R. (1985). Plant contraceptives: Translating folklore into scientific application. In D. B. Jelliffe & E. F. P. Jelliffe (Eds.), *Advances in international maternal and child health* (Vol. 5, pp. 107-114). Oxford, England: Clarendon Press.
- Fujikake, Yoko (1999) *Informe Análisis Situacional sobre Salud Reproductiva en Paraguay*, Agencia de Cooperación Internacional del Japón/ Ministerio de Salud Pública y Bienestar Social.
- 藤掛洋子（1999）『パラグアイ共和国におけるリプロダクティブ・ヘルス（家族計画）にかかる総合報告書』, 国際協力事業団。
- 藤掛洋子（2003）「パラグアイ農村女性の性と生殖に関する意識とその変化—農村女性の家族計画の「語り」と「実践」を手掛かりに（1994年—2001年）, 『健康・ジェンダー・セクシュアリティ』根村直美編著, 明石書店, pp. 85-115。
- 藤掛洋子（2004）『パラグアイにおけるカンベシーナの主体構築過程に関する研究—研究／調査者と実践者の往還から見た開発協力—』, お茶の水女子大学大学院博士学位論文。
- 藤掛洋子（2007）「グアラニー 先住民族女性が創りだす二一世紀」, 『講座世界の先住民族ファースト・ピープルの現在08』綾部恒雄／監修, 黒田悦子・木村秀雄編著, 明石書店, pp. 251-268。
- Gonzalez Torres, Dionismo M. (1997) *CATALOGO DE PLANTAS MEDICINALES (y Alimenticias y Utiles) USADAS EN PARAGUAY*, Editorial Litocolor SRL.

引用・参考文献

- Arenas, P., & Azorero, M. (1977). Plants of common use in Paraguayan folk medicine for regulating fertility. *Economic Botany*, 31, 298-300.
- 有澤宗久・林利光・百瀬寿徳（2001）「パラグアイの薬用飲料植物ニャンガビリーの効用」,

- Berry, Albert (1999) Las causas de la pobreza rural en America Latina y Políticas para reducirla, con referencia al Paraguay, *Revista Paraguaya de Sociologia*, Año 36 , No. 106: 7-33.
- CEPEP (1997) *ENCUESTA NACIONAL DE DEMOGRAFIA Y SALUD REPRODUCTIVA 1995-1996*.
- CEPEP (2005) *ENCUESTA NACIONAL DE DEMOGRAFIA Y SALUD SEXUAL y REPRODUCTIVA 2004*.
- DGEEC (2002) *Hogares particulares por área de residencia urbana-rural y tipo de vivienda según etnia, sexo del jefe y tipo de hogar 2002*.
- Low, S. M., & Newman, B. (1985). Indigenous fertility regulating methods in Costa Rica. In L. Newman, & J. Nyce (Eds.), *Women's medicine: A cross-cultural study of indigenous fertility regulation*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- 前澤岳男 (2005) 「バラグアイ農村部におけるマテ茶葉生産：2002－2004年カニンデジュ県ウガティミ市における事例―」(未発表報告書)。
- Marchand, M., & Parpart, J. (Eds.) (1995). *Feminism postmodernism development*. London and New York: Routledge.
- Mathonsi, E., & McKenzie, A. (1991). Rural women are using contraceptives. *Nursing RSA*, 2, 28.
- Quijano, N. V. (1986). Herbal contraceptives: Exploring indigenous methods of family planning. *Initiatives in Population*, 22, 31-35.
- Presidencia de la República Secretaría Técnica de Planificación (1998) *Dirección General de Estadística, Encuesta y censos 1992*, Asunción: Paraguay.
- Rensberger, B. (1994, July 25). Contraception the natural way. Herbs have played role from ancient Greece to modern-day Appalachia. *Washington Post*, A3.
- Schvartzman, J. B., Benitez, Z., & Azorero, M. (1975). Accion citostatica de una planta medicinal Paraguaya con probable efecto abortivo: *Aristolochia Triangularis* Cham. *Rev. Soc. Científica del Paraguay*, 15, 27-42.
- Schvartzman, J. B., Krimer, D. B., & Azorero, M. (1975). La Stevia Rebaudiana Bert (Ka'a-He'e) y el ciclo celular de allium cepa l. *Rev. Soc. Científica del Paraguay*, 15, 52-59.
- Sharma, V., & Sharma, A. (1989) Family planning practices among tribals: A study of indigenous and modern contraception in tribals of South Rajasthan. Unpublished manuscript.
- Stevens, E. P. (1973). Machismo and marianismo. *Society*, 10 (6), 57-63.
- Súsnik, Blanslava (1982) *El rol de los Indígenas en la formación y en la vivencia del Paraguay*, Asunción: IPEN.